

イル・ハン朝の二言語貨幣初探

中村雅之

1. 概況

イル・ハン朝(=フレグ・ウルス)とは13~14世紀、チングス・ハーンの子孫が現在のイランと周辺の地に建てた王朝である。本稿では、そのイル・ハン朝で発行された貨幣のうち、古代文字資料館の管理する2種を紹介するが、最初にこの時期の貨幣の概況を記しておきたい。イル・ハン国の歴代のハーンはおおむね以下の通り。左から、ハーンの名、ヒジュラ暦による治年、その西暦、右端の「A」は発行貨幣がアラビア文字アラビア語銘文のみを持つもの、「U」はアラビア文字アラビア語とウイグル文字モンゴル語の2言語銘文をもつもの、「A/U」は両種の貨幣が存在することを示す(ただし現在確認される限りの情報である)。

フレグ	654-663AH	1256-1265AD	A
アバカ	663-680AH	1265-1282AD	A/U
アフマド・テクデル	681-683AH	1282-1284AD	U
アルゲン	683-690AH	1284-1291AD	A/U
ガイハトゥ	690-694AH	1291-1295AD	A/U
バイドゥ	694AH	1295AD	A/U
ガザン・マフムード	694-703AH	1295-1304AD	A/U
オルジェイトゥ	703-716AH	1304-1316AD	A
アブー・サイド	716-736AH	1316-1335AD	A/U
アルパ・ケウン	736AH	1335-1336AD	A
ムーサー	736-737AH	1336-1337AD	A
ムハンマド	736-738AH	1337-1338AD	A
サティ・ベク	739AH	1338-1339AD	A
トガ・ティムール	737-754AH	1336-1353AD	A/U
ジハーン・ティムール	740-741AH	1339-1340AD	A
スライマーン	739-754?AH	1339-1353?AD	A/U
アヌシラワン	745-757AH	1344-1356AD	A/U
ガザン II	757-758AH	1356-1357AD	A/U

イル・ハン朝の貨幣の特徴の一つは、アラビア文字によって製造年(ヒジュラ暦)と製造地域が明記されることである。上表のそれぞれの治年も貨幣によってある程度裏付けられる。

第7代のガザンまでは、ウイグル文字モンゴル語銘文はハーン名を含んで4行ほど記されるが、それ以後は、ウイグル文字で記されるのはハーン名のみとなる。以下に紹介するアブー・サイドとスライマーンの発行した貨幣もウイグル文字はハーン名のみである。

2. アブー・サイド (Abū Sa'īd) の貨幣 [図1、図2を参照]

銘文の解説に入るが、イスラムおよびアラビア語についての筆者の知識不足から、正確に読めない部分があるため、今回はあくまで“初探”ということにしたい。

表面(図1)は全てアラビア語であるが、方形の書体で右下から時計回りに、(a)アッラーの他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり (Lā ilāh illā Allāh, Muḥammad Rasūl Allāh.)、(b)彼の上に神の加護あれ (Ṣallā Allāhu alaihi)、と記されている。

(a)はシャハーダ(信仰告白)の際に必ず唱えるべき文句で、イスラム圏で発行されるほとんどの貨幣に記されている。本貨幣のように方形の書体が用いられるのは珍しく、他にはアルパケウンとムハンマドの貨幣の一部に限られる。古いモスクなどにはこの書体がしばしば見られる。例えば、カイロのアル・モアイアド・シャイフというモスクの門には、ほぼ同じ書体で同文が記されている(図3参照、右上から時計回りに読む)。

(b)は「彼の上に神の加護と平安あれ (Ṣallā Allāhu alaihi wa sallam)」の後半部分が省略されたもので、ムハンマドの名を口にする(あるいは記す)際に習慣的に付加される言葉である。イル・ハン朝の貨幣では「Ṣallā Allāhu alaihi wa sallam」と記されるか、もしくは全く記されないのが普通であり、本貨幣のように「Ṣallā Allāhu alaihi」のみというのは稀である。

表面の周辺部には、四方にムハンマドの後継者すなわち正統カリフの名前が記されている。上・右・下・左の順に、アブー・バクル(Abū Bakr)、ウマル(Umar)、ウスマーン(Uthmān)、アリー(Alī)である。

裏面(図2)には中央にウイグル文字によるハーン名が「Busayid」とある。他の貨幣に見られるアラビア文字による綴りは「Abū Sa'īd」である。

上部の大きなアラビア文字は「博識にして公正なるスルターン(Al-Sultān al-ālim al-ādil)」とあり、下部の大字部分は「バハードゥル・ハーンは彼の支配を永遠にした(Bahādur Khān khallada mulkahu)」と読めそうであるが、読みの確定は保留したい。なお、アブー・サイドは「バハードゥル(勇者)」という称号を与えられていたため、ここでは「バハードゥル・ハーン」と記されている。

ウイグル文字のすぐ上にはやや小さめのアラビア文字で「打たれた(ḍariba)」、ウイグル文字を挟んですぐ下に「ジュルジャーン(Jurjān)」とある。「ジュルジャーン」は地名で、この地で本貨幣が打たれた(=打刻された)ことを示す。もしもウイグル文字の部分の主語と見なせば、「[アブー・サイドが]打った(daraba)」と読むことも不可能ではない。

裏面の周辺部には上部から反時計回りに「ハーンの33年に打たれた(ḍariba fī sinīna

thalāthun wa thalāthīn al-Khānī)」とある。通常のヒジュラ暦を用いずに「～al-Khānī」という表現を用いるこの紀年法は非常に珍しいが、おそらくアブー・サイードの生年から数えての紀年であろう。西暦では1337年頃に相当すると思われる。この珍しい紀年法は他のハーンの貨幣には見られず、また、この表現を用いる年も「33年」と「34年」しかない。この理由は以下のようなことであろう。

イル・ハン朝の第9代ハーンであるアブー・サイードが死ぬと、王朝は急速に乱れ始めたと言われる。第10代のアルパ・ケウンは即位してわずか半年で世を去り、その後は傍系のハーンが乱立する時代へと突入する。そのため、アブー・サイードをもってイル・ハン朝の正統を区切るのが一般的である。アブー・サイードは31歳頃に死んでいるから、「ハーンの33年」というのは彼の没後である。同時期に傍系のハーンの名を冠した貨幣も存在するが、アブー・サイードを正統と認める者たちによって没後も彼の名を冠した貨幣が製造されたのである。「ハーンの 年」とは正にアブー・サイードのみを正統と認める宣言とも言うべきものであったと考えられる。（以上は門外漢の当て推量に過ぎない。指教を俟つ。）

3. スライマーン (Sulaimān) の貨幣 [図4, 図5を参照]

イル・ハン朝末期の乱立ハーンの一人スライマーンの貨幣である。表面(図4)のアラビア語は銘文の上部が欠けているが、やはり「アッラーの他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり」とある。後半の「Muḥammad Rasūl Allāh」の部分は確認できる。また、周辺部には4人の正統カリフの名があるはずであるが、下端のウスマーンと右端のアリーのみ確認できる。

裏面(図5)には、中央にウイグル文字で「スライマーン・ハーン (Sul[a]iman Qan)」とあり、その上にアラビア文字で「公正なるスルターン (Al-Sultān al-ādil)」、下に「彼の支配を永遠にした(?) (khalīda mulkahu)」とある。周辺部に製造年が記されているはずであるが、大部分がつぶれており、確認は困難である。

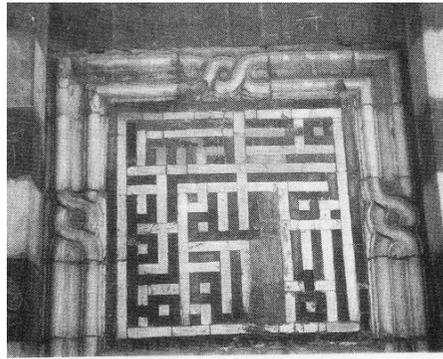
本貨幣ではウイグル文字によるハーン名は実際には「Suliman」と記されているが、他の貨幣では「Sulaiman」と見えるものもある。このハーン名のアラビア文字による表記は翻字すれば {S-L-Y-M-A-N} である（「A」はアリフ）。母音が明記されない文字であるから、理論的には多くの読みが可能であるが、ウイグル文字表記をも勘案すれば、まずは「Sulaimān」と読んで差し支えない。本貨幣にあるウイグル文字「Suliman」が単に誤って「a」を漏らしたものであるのか、それともアラビア文字表記に影響されたものであるのかについては不明である。



(図1) アブー・サイード(表)



(図2) 同(裏)



(図3) 本田・師岡『アラビア文字を読んでもみよう』(白水社1999)より



(図4) スライマーン(表)



(図5) 同(裏)